広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第39号　2011．3〉

中学校における新しい国際交流プログラムの開発Ⅲ

—Exploris Middle School・Odyssey School・MENDOYO SMP 4 との交流を通して—

神原　一之　　小田　啓史　　山崎　学肖　　松村　　健
朝倉　　淳　　深澤　清治

1．はじめに

本研究は，異文化・異文明を理解し，共存していく力をつけるために，どのような国際交流プログラムを実施することができるのか，指導の指針を明らかにしていくことを目的として，2008年度より開始した。

そのために，今までExploris Middle School（以下Exploris）及びOdyssey School（以下Odyssey）の両校と東雲中学校（以下，本校）との国際交流プログラムの実践を通して，その成果と課題を明らかにすることから指導の指針を探ろうとした。ExplorisとOdysseyは，ともにアメリカにある学校であり，両校とも本校と姉妹校提携を結んでいる学校である。しかし前者は東海岸にある博物館立の学校で，後者は西海岸にある私立の学校であり，所在地・設立形態・カリキュラムに大きな違いがある。このような違いが国際交流に与える影響を研究の視野に入れている。さらに2010年度より，インドネシアのジュンブラナ県にあるMENDOYO SMP 4（以下MENDOYO）との学校間交流を開始した。今までは先進国アメリカにある学校のみと交流してきたが，母国語が英語でない発展途上国インドネシアにある学校との国際交流の在り方についても研究の視点に加えた。

これまでの研究の成果として，英語を学び始めてまもない中学生にとって，最も国際交流において障壁になるのは語学力であるが，語学力が十分でない中学生であるからこそ，尚更，国際交流の場面では，伝えたい内容を明確にする指導・支援が重要であることがわかった（2008）。そうした指導に支えられた交流を通して，結果として，学習意欲を高めたり，他国や自国の文化に対する理解を深めたり，またグローバル・マインドの醸成につながることが期待できると考察した。

本年度はこれまでの課題を踏まえ，「伝えたい確かな内容を持たせること」，「相手が伝えたい内容をくみ取ること」に指導の重点を置き，広い視野をもった異文化理解を促進させるプログラムを計画・実践し，その成果と課題を明らかにすることが目的である。

2．MENDOYOとの国際交流

（1）学校の概要と交流の経過

MENDOYOはインドネシアのバリ島ジュンブラナ県にある中学校である。全校生徒約400名で全12学級（各クラス33名前後），教職員数は校長・副校長を含めて27名の規模である。グローバルパートナーシップの確立を重点目標としており，生徒に国際的な視点を持たせ，また教師の国際的な知見を増やすことをめざし，ジュンブラナ県行政の指導の下で国際交流プログラムを推進している学校である。カリキュラムは日本の中学校とほぼ同じであるが，国際交流を推進しているため，多くの外国語を学習しており，その中に日本語が必修教科として位置づいている。また，クラブ活動では，ガムランなどの民族楽器を用いた舞踊，日本の「よさこい」を取り入れたダンスを行うチームがあり，年間数回ほどアジアやヨーロッパなどで公演している。日本には広島で行われるフラワーフェスティバルに毎年パレード参加し，インドネシアの民族舞踊を披露するとともに，日本文化を学習している。

本校との交流は2009年度に，教員間の訪問からスタートした。お互いの教員が学校に訪問し，協議を繰り返した結果，2010年度に本校と姉妹校提携を結び，学校間交流を開始した。

（2）本年度の交流プログラム

2010年５月の来日交流の概要を示し，総合的な学習の時間におけるグループインタビュー活動についてその概要を述べる。

Kazuyuki Kambara, Hirofumi Oda, Michinori Yamasaki, Takeshi Matsumura, Atsushi Asakura, Seiji Fukazawa, Developing for New International Exchange Study III —Through Exchange Program about Exploris Middle School, Odyssey School and MENDOYO SMP4—

1）交流実施日

2010年５月６日（木）～５月７日（金）

2）交流プログラム

今回来日したMENDOYOメンバーは県職員２名，教師６名，通訳１名に１年生から３年生生徒20名（男子13名，女子７名）で構成されている。ホームステイはせずに，学校での交流のみを行った。交流の目的として，インドネシアの文化を理解することに焦点をあてた。３～４名ずつクラスに配属されたMENDOYO生徒らは，通常授業を日本語で本校生徒とともに受講した。授業内容については，隣席の生徒や教師が英語で可能な限り説明を行った。今年度の交流プログラムを表１に示す。

またMENDOYO生徒は，インドネシアについて本校生徒が興味関心を高められるよう日本の「よさこい」や自国の民族舞踊の紹介活動を，全校生徒を対象に体育館で１時間程度行った。踊りだけではなく，インドネシアの衣装や楽器などについて通訳の協力の下，説明を織り交ぜながら紹介を行った。最後には，MENDOYO生徒と本校生徒が一緒に踊り，インドネシア文化を体験した。

表１　MENDOYOとの交流プログラム（2010年）

月日	活動内容
5/6（木）	＜午前＞ ・Welcome Ceremony （姉妹校提携調印式を含む） ・配属クラスでの授業参加 ・総合的な学習に時間におけるグループインタビュー活動 ・昼食 ＜午後＞ ・インドネシアの民族舞踊紹介
5/7（金）	＜午前＞ ・配属クラスでの授業参加 ・特別支援学級生徒との交流 ・Sayonara Ceremony

3）総合的な学習の時間でのグループインタビュー

本校では総合的な学習の時間において，国際理解をテーマとし「国際人をめざし，異なる文化や考え方を受け入れ理解しようとする意欲の向上を図ること」を重点目標とした取り組みを行っている。３年生が４つのグループ（そのうち１つは特別支援学級生徒だけのグループ）に分かれ，それぞれの研究を進めている。

インドネシアグループでは「お互いの文化を知る」ことを目標にして，本やインターネット，インドネシア在住経験者へのインタビューなどから，インドネシアについての基本的知識やあいさつ程度のインドネシア語を学習している。交流当日は，これまでの学習内容や昨年度の研究内容を参考に，インタビュー活動を行った。インドネシア語による質問ができず，両校で学習している英語を用いた。インタビュー活動における具体的な質問例を表２に示す。

表２　インタビュー活動における具体的質問例

カテゴリー	具体的質問内容
学校生活 学習	・学校は好きか？ ・どんな教科を勉強するか？ ・塾に行っているか？
インドネシアの文化	・化粧，香水，ピアスはするか？ ・ピアスは女子全員するのか？ ・断食についてどう思うか？ ・家の造りはどうなっているか？
日本についてのイメージや知識	・日本の有名な場所を知っているか？ ・日本（広島）をどう思うか？ ・日本文化を知っているか？
個人的質問	・将来の夢は何か？ ・ケータイを持っているいか？ ・何をして遊ぶか？

インタビューの形式については，本校生徒とMENDOYO生徒を３～４名の小グループに分割し，そこで活動を行ったが，お互いの英語能力に差があり，英語によるコミュニケーションが上手くとれない様子も見られた。しかしながらジェスチャーや筆談などでコミュニケーションを図ろうとするグループも多く見られた。どうしても互いの意思疎通ができていない４～５グループに対しては，インドネシア語と日本語ができる通訳が入り意思疎通を図った。なおグループごとにローテーションをし，出来るだけ多くの生徒と意見交流ができるように計画したが，英語でのコミュニケーションがうまく進まなく，ジェスチャーや筆談，通訳を介したコミュニケーションに時間がかかり，実施できなかった（写真１）。

インタビュー活動後に行った，アンケート自由記述の一部を次に示す。

〈生徒の感想例〉

・日本とインドネシアでは，英語の発音もちょっと違ったりして，通じないことがあったので大変でした。でも，ジェスチャーしながら話してくれたり，前のめりで真剣に聞いてくれたりしました。
・インドネシア語も話せないし，英語もあまり通じなくて通訳の人ばかりに頼っていました。なので，伝えたいことをうまく伝えるのは難しいことなんだということが分かりました。

写真１　インタビュー活動をする生徒たち

・積極的に話せてとてもいい時間になった。
・言葉は通じないけど，Explorisの人たちよりは話しやすい。

（３）考　　察

総合的な学習の時間におけるインタビュー活動を終えた生徒の感想からは，今まで生徒がもっていたインドネシアのイメージ（固定概念）を変えること，今までに体験したアメリカ人との交流と比較することにもつながり，より広い視野で異文化理解を体験することができ，かなり有益であったと判断される。

しかし，従前からあげられていたコミュニケーションツールとしての言語の課題が交流を通してより一層大きなものとなった。これまでの研究により，「伝えたい確かな内容を持たせること」や「相手が伝えたい内容をくみ取ること」が指導のポイントであると認識し，質問内容の吟味やアクティブリスニングの学習を事前学習として行ってきたが，お互いに母語ではない言語を使ったコミュニケーションは生徒にとっては一層ハードルが高いように感じられた。今回のような交流を行うには，本校生徒の一層の英語力の向上が必須となる。一方，言語の負荷が少なくなるような交流プログラムの工夫が必要であろう。

３．Explorisとの国際交流

（１）学校の概要と交流経過

Explorisは，アメリカノースキャロライナ州ローリーにある生徒数180名，教職員数18名規模の博物館立の学校である。日本語を必修教科として学習していないが，日本文化について英語で学習を進めている。2001年に本校と姉妹校提携を結び，2003年より教職員・生徒の相互訪問，交流を開始した。

本校からは，毎年８月に８名程度の生徒と２名程度の教員が渡米している。渡米生徒は，渡米目的を記した作文や日本語面接及び英語技能をみる英語面接などで選考している。渡米交流では，通常授業への参加はもちろん，日本文化の紹介やアメリカ文化についてリサーチクエスチョンを行い，文化交流を行っている。また，本校教師による授業や，日米間の教育事情について教員同士の情報交換会を行っている。

（２）本年度の交流プログラム

2010年８月に行った渡米交流の概要を示し，ここでは特に，リサーチクエスチョンについての活動，及び本校に戻っての報告会について詳しく述べる。

１）交流実施日

2010年８月18日（水）～８月25日（水）

２）交流プログラム

事前に教員間におけるメール交換によりプログラムを調整し，表３のような日程で交流プログラムを実施した。基本的にはExplorisの通常授業に参加し，放課後はそれぞれのホストファミリーと活動した。

３）リサーチクエスチョン

これまでも渡米した生徒がそれぞれのアメリカ文化に関するリサーチクエスチョンを用意して，Explorisの生徒や先生，ホストファミリーに質問を行ってきた。今回は，本校で行われる来日交流プログラムをより有

表３　Explorisとの交流プログラム（2010年）

月日	午前の活動	午後の活動
8/18（水）		ローリー着 Welcome Party
8/19（木）	Welcome Ceremony 授業参加（自己紹介を含む）	日本文化紹介 （７年生対象）
8/20（金）	通常授業参加	日本文化紹介 （８年生対象）
8/21（土） 8/22（日）	ホストファミリーとの活動	
8/23（月）	通常授業参加 Exploris 生徒に対する東雲教員授業（俳句）	通常授業参加 Exploris 生徒に対する東雲教員授業（保健） 教員間ミーティング
8/24（火）	通常授業参加	日本文化紹介 （６年生対象） Sayonara Party
8/25（水）	ローリー発	

益なものにするために，「日本人とアメリカ人の考え方の違い」をテーマにしたリサーチクエスチョンを設定した。このテーマを設定した理由は，国によって習慣や文化が異なるが，その背景にはそれぞれの国での考え方が影響していると仮説をたて，考え方を知ることで習慣や文化についてより深い理解をはかろうとした。「生活習慣」「食文化」「マナー」「学習」の４つのカテゴリーごとに質問を考えた（表４）。それぞれの生徒が10名以上のアメリカ人にこれらの質問を行った。

表４　カテゴリーごとの具体的質問内容（抜粋）

カテゴリー	具体的質問内容
生活習慣	・バスタブを使用して風呂に入るか？
食文化	・お菓子を食べる時カロリーを気にするか？ ・体型を気にするか？
マナー	・チップを払うか？ ・会話時に気をつけることは？
学習	・勉強は好きか？ ・好きな理由，嫌いな理由は？ ・何のために勉強するのか？

リサーチクエスチョンで得た情報を集計・分析し，10月の報告会で全校生徒に伝えるために資料を作成し，全校生徒に対してパワーポイントを活用して報告した。今回のリサーチクエスチョンをまとめた内容を下の表５に示す。

表５　リサーチクエスチョンのまとめ

カテゴリー	結果
生活習慣	・風呂に入る目的が違う。
食文化	・カロリーは気にしないが，体型は気にする人が多い。
マナー	・感謝や謝罪の気持ちを示す。 ・自分が主体的になって話す。
学習	・自分の目標を明確にしている。 ・強制ではなく自ら進んでしている。

⇩

＜提案＞
１．授業の受け方を変えてみよう！
２．自分で進んであいさつをしよう！

（３）考　察

これまでは，渡米交流と来日交流が有機的に連動していなかったが，報告の内容をリサーチクエスチョンの結果と提案にしぼり，渡米して活動した内容を全体に報告することで，つながりを意識した活動になったと考える。渡米していない生徒も，報告会での話を参考にして実際にExploris生徒と交流すれば，研究の視点でポイントである「相手が伝えたい内容をくみ取ること」につながり，国際理解の輪が広がると考えている。

課題としては，リサーチクエスチョンの質問内容が考え方の違いについて情報を得るような質問になっていないものがあったことである。例えば「生活習慣」のカテゴリーについては，風呂という限定された習慣ではなく，日常においてかなり頻繁に目にするような状況についての質問を設定することが必要だろう。今回は質問をしてデータを分析しても，それが本当にアメリカ人の考え方を理解することにつながるのかという妥当性を確認することができなかった。事前学習でのリサーチクエスチョンの質問内容に関する吟味が必要となってくる。３月に行われる来日交流で，今回の取り組みについて検証したい。

４．Odysseyとの国際交流

（１）学校の概要と交流経過

Odysseyは，アメリカカリフォルニア州サンマテオにある，全校生徒30名程度規模の私立学校である。いわゆるgiftedと呼ばれる生徒を対象に独創的な教育活動を展開している学校である。Odysseyは毎年日本に修学旅行で，東京，宮城，京都，広島などを訪問している。Odysseyの生徒は日本語が必修教科で，日本文化，政治について学校で学習している。ひらがなを書いたり読んだりできる生徒がほとんどである。本校とは，2007年より毎年，宮島にて１日の交流活動を行ってきた。宮島での活動においては，「宮島てらこや」※1の協力をいただき，「お箸作り」や「もみじまんじゅう作り」を一緒に行ってきている。また，「ディスカッション」活動において，これからの交流の可能性について意見を出し合い，メールによる日常的な交流も始まった。

2010年度に姉妹校提携を結び，本格的に学校間交流を開始した。そして，Explorisとの交流同様にOdyssey生徒８年生８名（男子３名，女子５名）は本校生徒の家にホームステイし，本校で日本語による通常の授業を受講した。

今年度は本格的な学校間交流を開始したことにともない，お互いの学校について情報交換を行い，相互理解を深められるように交流プログラムを計画した。

（２）本年度の交流プログラム

2010年５月に行った来日交流の概要を示し，ここでは，学校での交流の中で総合的な学習の時間におけるディスカッションと宮島交流で行ったOdysseyで行わ

れている授業の体験の詳細を述べる。

１）交流実施日

2010年５月13日（木）～５月15日（土）

２）交流プログラム

配属クラスにOdyssey生徒が１～２名ずつ入り授業を受け，休憩時間や昼食時などにクラスの生徒と交流した。宮島では，ホストファミリーの２・３年生生徒および総合的な学習の時間Odysseyグループ３年生生徒20名で交流した。

表６　Odysseyとの交流プログラム（2010年）

カテゴリー	具体的質問内容
生活習慣	・バスタブを使用して風呂に入るか？
食文化	・お菓子を食べる時カロリーを気にするか？ ・体型を気にするか？
マナー	・チップを払うか？ ・会話時に気をつけることは？
学習	・勉強は好きか？ ・好きな理由，嫌いな理由は？ ・何のために勉強するのか？

３）交流の実際

①総合的な学習の時間におけるディスカッション

ディスカッションの内容はお互いの学校精神についての説明や話し合いである。Odysseyでは前述した通り，日本語や日本文化を学習しており，学校精神にも日本文化が影響している。Odysseyの校訓は「ZEN」と呼ばれるもので，これは日本の「禅」の影響を受けて作成されたもので13条からなる。本校では「東雲憲章」と呼ばれる生徒の生活指針があり，お互いの学校精神を理解することを目的とした。

ディスカッションの具体的な内容は，Odyssey生徒が「ZEN」について簡単な説明を行い，その後小グループに分かれて，本校生徒からの質問を交えながらの情報交換を中心に進めた。giftedと呼ばれる人たちは一般的に，①完璧主義者，②間違うことはしようとしない，③チャレンジなことは避ける，④上手にできることだけを繰り返して行うという性向をもっていると考えられている。つまり「ZEN」にはそのような性向を克服するgiftedな生徒を育成する考えが込められている。例えば，「Are you still painting the same picture?（いつも同じ絵を描いていて成長があるのか）」という問いを生徒に投げかけている。Odyssey生徒が「ZEN」の各条の意味と具体的な行動への反映について説明した。Odyssey生徒は，日本語と英語の両方を使いながら本校生徒が理解できるよう丁寧に説明した（写真２）。

写真２　Odyssey生徒と話し合いをする様子

②Odysseyの授業体験

今年度は，宮島島内でのフィールドワーク後Odysseyで実際に行われている授業を本校生徒が体験する機会を設定した。今回の授業は「シェイクスピアの世界に挑戦」というテーマで，劇を演じるかのように身体をつかったコミュニケーションに関するものである。興味深いのは，この授業では言葉を使わずに行う活動と言葉をどう伝えるかを中心に考える活動の２種類があることである。

言葉を使わずに行う活動では，ある設定された状況の中でジェスチャーだけを用いて，自分の言いたいこと（伝えたいこと）を表現する。例えば，ベンチに座っている人次々に逃げ出すような少し変わった設定である。ジェスチャーの条件は「前の人がやったことと同じことをしない」である。考える時間は短時間で，前の人の演技終了後即座に自分で考えた演技を行い，演技している状況を相手に分かりやすく伝えなければならならず，非常に難しい。Odyssey生徒が手本を見せた後に，両校生徒が入り混じった小グループに分かれて練習を行い，最後にはグループごとにお互いの演技を鑑賞した。

言葉をどう伝えるかを中心に考える活動は，英語で書かれたスキット（会話文）を表現するものである。セリフはあるが状況や人物設定は各グループで決めることができる。そして，スキット中の５秒間の空白では言葉ではなくジェスチャーで状況を表現する。状況や人物設定に戸惑う生徒が多く，打ち合わせにかなり苦労した。打ち合わせと練習の終了後，グループごとに披露し，Odysseyの先生がコメント（評価）した。

今回のOdysseyとの交流を終えた後の生徒の自由記述を下に示す。

〈交流に参加した生徒の感想〉

・ZENは当たり前のことだけど，全て大切だと感じた。当たり前のことをきちっとやっているオデッセイの人はすごい。
・東雲憲章と比べて，分かりやすいのでZENの方が取り組みやすいように感じた。
・オデッセイでの授業は楽しかった。恥ずかしい思いを越えて交流することで，お互いをより知ることができた。
・内容がよくわからない部分もあったけど，ジェスチャーなどを使って，表現することは大切だと分かった。

（3）考　察

今回はお互いの学校についてより深く理解することを目的とした交流活動を設定して行った。国が違えば習慣や文化は異なるのは当たり前のことであるが，互いの学校精神を学習した後に授業を受けることで，習慣や文化について一層理解を深めていた。

Odysseyとの交流において特徴的なことは，Odyssey生徒はかなり日本語に精通し，日本語でのコミュニケーションが可能な点である。本校生徒にとっては英語で自分の思いを伝えることはかなり負荷がかかることであるが，日本語を交えることにより，その負荷が軽減されている。結果として，Explorisとの交流以上に深いディスカッションが可能となり，より深い理解につながっている。

5．おわりに

国際交流においては，「伝えたい確かな内容を持たせること」と「相手が伝えたい内容をくみ取ること」に重点をおいて指導することが重要な指導の視点と考え，それらを実践する活動を設定した。インドネシアの学校と交流を広げることによって，今まで以上に幅広い異文化理解の視点をもつことができるようになった。言葉によるコミュニケーションの難しさはあるものの，生徒たちにとって有意義な交流にするために，参加型の活動，例えばジェスチャーなどの動きを伴う活動を，コミュニケーションを必要とする場面に設定することも効果があることを再度確認することができた。

また，それぞれ異なった特徴（Explorisは英語が母語で日本語をあまり話すことができない，Odysseyは英語が母語で日本語を上手に話すことができる，MENDOYOは英語が外国語で日本語をあまり話すことができない）をもつ学校との国際交流プログラムを比較してみると，言語の違いはあるけれども研究の視点にあげたポイントは交流を促進させる上で，有効であることが分かる。

次年度は，言語負荷の異なる3つの国際交流プログラムによる学習意欲の向上の差，他国や自国の文化に対する理解の深まりなどを含めた，グローバル・マインドの醸成につながる量的なデータを基にした考察を行いたい。また本校生徒がこの交流を通してどのような資質・能力を形成しているか明らかにしていきたい。また，これまでの研究で明らかになった指導の指針を基に言語負荷を少なくしたジェスチャーゲームのような活動などを多く取り入れるなど創意工夫を凝らした国際交流を計画，実施し，実証していくことが課題である。

※1「宮島てらこや（会長　上田宗冏　事務局㈱ディアフォロン）」は，子どもたちと本気で向かい合い，世界遺産の宮島をメインフィールドに，日本・広島・宮島の自然や伝統文化を共に学び体験し，「大人が育つ，子どもが育つ地域づくり」を目指しているものである。

参考文献

神原一之．「表現・コミュニケーション力」の育成を目指した総合的な学習の時間の実践．日本生活科・総合的学習教育学会第14回全国大会（広島大会）公開授業活動案・指導案集．2005．pp.58－63
神原一之ほか（a）．中学校における新しい国際交流プログラムの開発―Exploris Middle School・Odyssey Schoolとの交流を通して―．広島大学学部・附属共同研究機構研究紀要．2008．pp.63－68
神原一之ほか（b）．中学校における新しい国際交流プログラムの開発Ⅱ―Exploris Middle School・Odyssey Schoolとの交流を通して―．広島大学学部・附属共同研究機構研究紀要．2009．pp.63－68
小原友行．グローバル・パートナーシップを推進するための人材育成およびプログラム開発―広島大学グローバル・パートナーシップ・スクールセンター設立に向けて―（2007－2008）米日財団奨学寄付金事業成果報告書．2008．
宮原修編集．国際人を育てる―世界の中の日本人―．ぎょうせい．1998．
山極　隆ほか編．豊かな人間性や社会性，国際社会に生きる日本人．ぎょうせい．1999．